

平成 25 年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：2013年4月～2014年3月

※今年度の年次報告書は担当者の名前、メールアドレス、添付資料を除き、HP等で公表
します。また、ユネスコスクールの質の確保の観点から、報告書の内容が一定の基準に満
たないもの、報告書が未提出の場合には、ユネスコスクールの認定取消を勧告させていた
だきますので、あらかじめご了承ください。

1. 学校概要

学校名 宮城県角田市立東根小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 高等学校 中等教育学校
 教員養成 技術/職業教育
 その他 ()

住所 〒981-1533
宮城県角田市平貫字前河2

E-mail : higashine-es@kakuda-c.ed.jp

Website : //www.kakuda-c.ed.jp/higashine-es/

児童生徒数：男子 19 名 女子 31 名 合計 50 名
 児童・生徒の年齢 7歳～12歳

2. 担当者 ※公表しません

3. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

4. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

※当報告書についてはユネスコスクールホームページに掲載するため、活動内容につ

いては、添付資料ではなく本報告書にご記入願います。

平成25年度 東根小学校 校内研究の概要

- 1 研究主題 進んで学びをつなげ、広げ、深める子どもの育成（1年次／2年）
副題 ESDの考え方に沿った授業づくりを通して

2 主題設定の理由

（1）教育の今日的課題から

これからの時代を担う子どもたちには、変化の激しい社会の中で、幅広い知識を基盤として思考力・判断力・表現力等を柔軟に働かせながら、ものの見方や考え方が違う様々な人々と共存していく能力を身に付けることや、一人の人間として自立し、社会の中心的な形成者としての役割を果たしていくことが求められている。このことは、人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性を育むことや、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を尊重できる個人を育むことを目的とした、持続可能な社会づくりの担い手となる個人を育成する教育（＝持続可能な発展のための教育、以下ESD）と大きく重なるものである。また、学習指導要領においても「持続可能な社会の構築」の観点が盛り込まれ、ESDの考え方に沿う教育を行うこととなった。そこで、各教科で積み上げた基礎的・基本的な知識・技能を踏まえ、社会の現実的問題に臨んでいく授業、各教科の知識・技能を横断的・総合的に活用し実践していく授業を創造する必要があると考えた。

（2）学校教育目標の具現化から

本校では「知・徳・体の調和のとれたたくましい児童の育成」を教育目標として掲げ、「学び合う子ども＝基礎・基本を身に付けると共に、自分の考えをしっかりと持ち、学び合い高め合う子ども」「支え合う子ども＝基本的な生活習慣を身に付け、豊かな情操と感謝の心をもつ子ども」「きたえ合う子ども＝目標をもち、基礎となる体力を培うとともに、進んで勤労に励む子ども」を育てることを目指している。特に、平成21年のユネスコスクール加盟以降は「ESDの考え方に沿った教育活動の在り方の探求」を重点努力事項の一つに位置付け、主に総合的な学習の時間や特別活動において、探求や実践を重視した体験学習を展開してきた。平成24年度には、木造教室棟建設に伴う一連の学習活動が認められ、第3回ESD大賞「小学校賞」に選出された。

一方、今後は児童の減少に伴う小規模化・複式学級化が進むことが分かっており、児童一人ひとりの個性や特性に応じた指導がしやすい反面、児童同士の高め合いや学び合い、社会性の醸成、自立心や社会性の育成等の面で課題が生じることが懸念されている。そこで、学んだことを生かして新たな問題を解決したり友達と考えを出し合ったりする中で、共に学ぶ楽しさや成就感を体得するとともに、新たな意欲をもって主体的に学習に取り組む児童を育てることが必要であると考えた。「進んで学びをつなげ、広げ、深める子どもの育成」という研究主題を掲げた本研究は、まさに本校の教育目標の具現化につながるものであると考える。

（3）これまでの研究の経過と児童の実態から

本校では、昨年度まで「確かな学力を身に付けた児童の育成～数学的な思考力・

表現力を育てる算数的活動の工夫」という研究主題のもと、算数科を中心に3年間の研究を進めてきた。その結果、問題把握の場面、自力解決の場面、考えを出し合い学び合う場面などでの指導の工夫が授業実践を通して提案され、大きな成果が得られた。そこで、今年度は、昨年度までの研究で有効だった指導方法を継承しながら、算数科以外の教科、領域の指導においても思考・表現活動を通して多面的に考察する力や問題解決の力を育てていくことを目指し、研究主題を見直すことにした。

平成24年4月に実施した全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、多くの児童が「総合的な学習の時間」の授業で学習したことは普段の生活や社会に出たときに役に立つと思っていること、普段の授業の中で自分の考えを発表する機会や友達との間で話し合う活動は多くあるが、自分の考えを他の人に説明したり文章に書いたりすることは難しいと思っていること、などが分かった。また、自然の中での遊びや自然観察の経験が乏しく、理科の学習を実生活や実社会に結びつけて考えている児童が少ないということも分かった。(資料1)

本校の児童は、全体的に意欲的で、与えられたことや指示されたことに対しては真面目に取り組む姿が見られる。しかし、小さいときから少人数の同じ集団で生活しており指導や支援の手が行き届きすぎるためか、自ら進んで課題の解決に取り組んだり、創意・工夫をしたりすることが苦手な児童が多い。したがって、基礎・基本の知識・技能を身につけさせるにとどまらず、自分で考え、進んで課題を解決していこうとする意識を育てていく必要がある。児童一人一人に問題解決の過程をじっくり歩ませ、その過程の中で自己の学びに価値を見いだせるようにしたり、実生活や実社会における各教科の活用の在り方や実際の応用の仕方について体験的に捉えさせたりするような学習指導が重要であると考えた。

3 主題・副題のとらえ方

(1) 主題について

主題について、次のように定義する。

・学びをつなげる＝ 課題について、その教科や他教科・領域等における既習事項をもとにして解決したり、その結果を次の課題解決に生かしたりすること。

・学びを広げる＝ 課題解決の課程で新たな課題に気づき、多面的に課題に迫っていくこと。

・学びを深める＝ 課題について自分で考えたことをより明確にするために、多様な根拠を追求したり、他者とかがわったりすること。

(2) 副題について

ESDの考え方に沿った授業とは、学習内容を持続可能な社会づくりの視点から捉えて学習活動を展開することである。本研究では、ESDのねらいを「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること」とおさえ、このねらいの達成に向けた授業設計や授業改善を行うことを目指す。

具体的には、次のような点に留意することが大切であると考えます。

・人や社会、自然との「かかわり」「つながり」を重視すること
・単に知識、技能の習得や活用にとどまらず、児童の体験や実践を重視すること

・児童の自発的かつ具体的な行動を促すことを重視すること

4 研究目標

ESDの定着と充実に向けた年間指導計画の見直しと教材開発を通して、ESDの考え方に沿った指導方法の在り方や評価の在り方などを明らかにする。

5 目指す児童像

- ・学びをつなげる子ども＝ 課題について、既習事項をもとにして解決したり、その結果を次の課題解決に生かしたりできる子ども
- ・学びを広げる子ども＝ 課題解決の課程で新たな課題に気づき、多面的に課題に迫っていくことができる子ども
- ・学びを深める子ども＝ 課題について自分で考えたことをより明確にするために、多様な根拠を追求したり、他者とかがわったりできる子ども

6 研究の視点

「学校におけるESDに関する研究（国立教育政策研究所）」によれば、ESDの視点に立った学習指導を進める上で重要なことは、①教材（学習課題、学習内容）を内容的・空間的・時間的につなげること、②学習者同士、学習者その他の立場・世代の人々、学習者と地域・社会などをつなげること、③身に付けた能力や態度を具体的な行動に移し、実践につなげること、であるとされている。そこで、本研究においては、主題に迫るための視点を以下の3つに焦点化し、研究実践を進めることとする。

【視点Ⅰ】 学習の系統性や連続性を明確にした指導の工夫

- ア 学習指導要領・指導内容の分析と年間指導計画の見直し
- イ ESDカレンダーの作成と活用

【視点Ⅱ】 人や地域との関連性を明確にした指導の工夫

- ア 地域教材の開発と地域人材の活用
- イ 参加体験型の単元構成の工夫
- ウ ESDマップの作成と活用

【視点Ⅲ】 個に応じた指導の工夫

- ア 問題解決的な学習展開の工夫
- イ 興味・関心や理解、習熟の程度に応じた指導の工夫
- ウ ESDシラバスの作成と活用

7 研究計画

(1) 年次計画

- | | | | |
|-----|-------------------------|------------|---------|
| 1年次 | 研究主題・副題の設定 | 全体構想の策定 | 実態調査の考察 |
| | 年間指導計画の見直しとESDカレンダー等の作成 | | |
| | 研究の視点に基づいた授業研究 | 研究授業の検証と評価 | |
| 2年次 | 研究副題と研究の視点の見直し | 実態調査の考察 | |
| | 研究の視点に基づいた授業研究 | 研究のまとめ | |

(2) 本年度の研究内容と方法

- ①研究の視点に基づいた授業実践を行い、その検証と改善を行う。
 - ・一人一回以上の研究授業（事前検討会、研究授業、事後検討会）
- ②学力向上成果普及マンパワー活用事業や大学連携事業等を活用し、指導法に関する研修を深める。

③児童の意識調査を行い，児童の実態と変容について分析する。

(3) 本年度の研究の検証と評価の視点

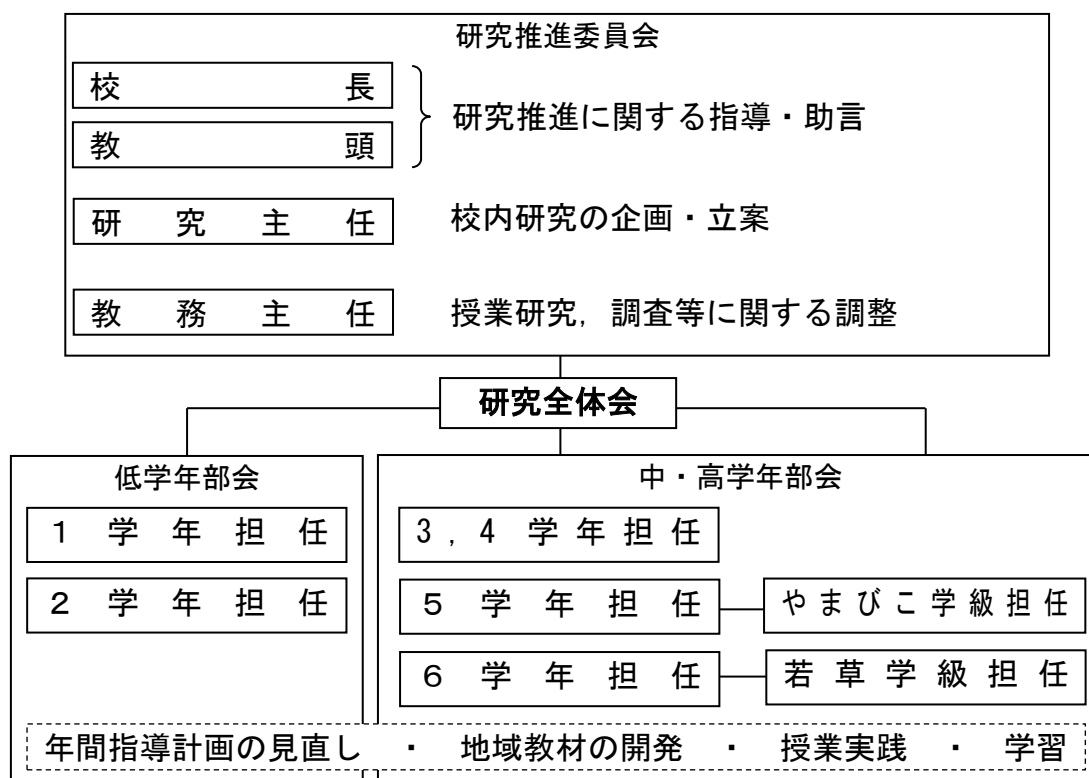
・日常的な学習指導における児童の成績物（ノート，ワークシート）の累積と変容の記録

・総合的な学習の時間に関する意識調査による児童の意識の変容（資料2）

(4) 本年度の研究日程

月	内 容	月	内 容
4	4/ 4 全体会 ・研究テーマの確認， 年間計画決定 4/11-12 角田市標準学力調査	10	10/ 8 複式学級指導研修会 (僻地研) 10/17 授業研究（3・4年）
5	5/ 1 児童の意識調査 5/24 指導案検討会	11	11/26 授業研究（5年） ※北角中学校区 学力向上推進研修会 宮城教育大学連携事業
6	6/14 指導主事学校訪問	12	12/16 授業研究 (6年・特別支援)
7	7/24 校内研修 (ESDカレンダーの作成)	1	1/ 9 児童の意識調査 1/25 授業実践のまとめ
8	8/23 伝講会	2	2/25 全体会 (研究の検証と評価) ※次年度の研究について
9	9/9 授業研究（低学年）	3	3/25 「研究の記録」完成

8 研究組織



9 研究全体構想図



10 研究の成果と今後の課題

研究の第1年次として、研究テーマであるESDとは何か、という理論研究や年間指導計画の見直し、教材開発をもとに授業実践に取り組んできた。本年度の研究から得られた成果と課題は、次のとおりである。

【成果】

- ・ ESDの認識と研究の方向性については、宮城教育大学准教授・島野智之氏から高いレベルにあるという評価をいただいた。
- ・ ESDマップの作成を通して、ESDの視点に立った年間指導計画の見直しを図ることができた。
- ・ 生活科や総合的な学習の時間における体験的な活動について、ESDの視点に沿った目的意識を持たせることで、活動の広がりや深まりが生まれた。
- ・ 社会科や理科の学習において、環境問題などに直結する学習内容の単元では、単元のねらいを達成することが同時にESDの視点に立った学習指導で重視する能力や態度の育成に結びつくということが分かった。
- ・ 体験だけでなく考えたことの発表や話し合いの機会などを何度も持つことにより、コミュニケーション能力の向上を図ることができた。

【課題】

- ・ ESDの視点を十分に意図した学習にするためには、現在の指導計画のどこを改善すればよいか、具体的な改善点が分からない部分も多く、一層の教材研究が必要である。
- ・ 児童の意識調査から、学習したことを多様な方法で発表する機会の充実や、自己評価の方法、他教科との関連性がはっきりと分かるような学習過程の工夫が必要である。
- ・ 話の聞き方や話し合いの仕方など、言語活動を通じた他者との関わり合いのスキルを高めていく必要がある。
- ・ 施設見学や働く人々との直接的なふれあい体験以外にも、様々な人や機関などとの交流、連携など、課題解決のための情報収集についての工夫が必要である。

次年度は、これまでの研究の成果を生かし、以下の点に重点をおいて一層の研究の充実を図っていきたい。

- ・ ESDカレンダーを活用し、すべての教科指導において、他教科との関連や学習の連続性を意識した、ESDの視点に立った指導過程の改善を図る。
- ・ 課題解決の過程や言語活動による表現活動の充実、発表会などの相互評価の機会の拡充を通して、他者との関わりの中で問題解決の力や多面的に考察する力を育てていく。

